

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：34302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24720080

研究課題名(和文) フランス革命期の演劇における女性像の研究 男装のヒロインの表象と受容の検証

研究課題名(英文) Study of the image of women in theatre in France between French Revolution :  
Representation and reception of women cross-dressing to men

## 研究代表者

中山 智子 (NAKAYAMA, Tomoko)

京都外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80434645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：フランス革命期にしばしば上演された女兵士を描いた劇は、社会的な愛国心の高まりと、実際に兵士として従軍した女性たちの存在を反映している。一方で、女性の従軍は風紀を乱すなどの理由から禁止され、戯曲ではヒロインが軍を辞め家庭に戻るなど伝統的女性像の賛美も見受けられる。当時の演劇には革命歌が多く用いられ、観客に舞台と現実社会との関連を強く喚起すると同時に、ヒロインに革命期の英雄のイメージを与えている。

研究成果の概要(英文)：During the French Revolution, plays with a female soldier as a heroine were often performed. These plays reflect both increased patriotism in French society as well as role of actual women who served in the army. However, women were soon to be prohibited to serve in the army for it was considered to disturb the public morals. Thus, some plays depict the heroine leaving the army and returning to her family, a way to extol the virtues of the traditional role of women. The plays written during the French Revolution often feature revolutionary songs as a mean to remind the audience not only of the relationship between the stage and the actual society, but also to reinforce the image of the female soldier as a hero of the Revolution.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス演劇 フランス革命 女性像 異性装 兵士

### 1. 研究開始当初の背景

フランス 17、18 世紀は、異性装が文学作品ばかりでなく実社会にも多く登場した世紀として知られる。異性装の先行研究としては史料に基づいた異性装の歴史研究 (Steinberg 2001) が発表され、フランスで国際学会 (2005) が開催されるほど関心は高まっている。フランス演劇における異性装についての研究の必要性は歴史学者によっても指摘されていた (Pellegrin 1999)。16、17 世紀演劇における変装の研究の中で異性装も取り上げ分析されているが (Forestier 1988)、18 世紀演劇の異性装の研究が待たれていた。このような背景のもと、申請者は 1999 年以来、17 世紀末から 18 世紀の演劇における異性装、とりわけ男装のヒロインについての精密な研究を行ってきた。

### 2. 研究の目的

本研究は、フランス革命期にパリで上演された舞台芸術を資料として読み解き、革命期特有の女性像の表象を特定することを目的とする。男装のヒロインは理想化された男性像と女性像を同時に具現化しており、大衆が抱く理想像が強く反映されている。

研究の具体的な目的として次の項目を予定している。

- (1) 男装のヒロインを持つ革命期の上演作品のデータベースを構築、分析し、ヒロイン像を検証する。
- (2) 同時代の観客による受容を分析する。
- (3) 革命期以前との比較により、フランス革命期特有の女性像の表象を総合的に検証する。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の方法で行われた。

- (1) 革命期の演劇状況の確認及び革命期に創作された男装のヒロインを持つ舞台作品の特定

- (2) 作品のデータベースを構築し、客観的データから革命期の上演作品の特徴を分析
- (3) 革命期に上演された作品に描かれた女性像の分析

- (4) 上演に関する当時の記録、劇評の調査により、作品の受容の研究

- (5) 革命期以前の男装のヒロイン像との比較から、革命期特有のヒロイン像を検証

### 4. 研究成果

本研究は、フランス革命期にパリで上演された舞台芸術を資料として読み解き、革命期特有のヒロイン像を検証することを最終的な目的としている。平成 24、25 年度は男装のヒロインを持つ作品の特定とデータベースの構築を、平成 26 年度は各作品の分析と受容について調査を行ってきた。平成 27 年度は、特に男装のヒロインの歴史的・社会的背景と劇中使用された音楽について研究を行った。資料調査によって作品内で重要な場面で使われた革命歌の楽譜を発見し、日本とフランスで演奏家の協力を得て、当時の楽譜を元に革命歌を再現することが可能となったため、作品の分析を順調に行うことができた。平成 28 年度は資料調査、作品分析、海外での国際的な学会での発表および論文作成を行い、フランス革命期の男装のヒロイン像と革命歌の関係、及び上演の形態と劇場が持つ社会的な意義について検証を行った。

(1) 平成 24 年度は、本研究の基盤となる、革命期に上演された男装のヒロインを持つ舞台作品の特定と上演記録の調査を目的に研究活動を進めた。まず、革命期のパリの主たる劇場の上演演目の調査を行うため、劇場についての基礎的なデータ収集を行った。18 世紀前半には、常設劇場が 3 つであったのに対して、革命期には劇場が次々と創設され、その数は 35 に上る。それらの劇場について調べた結果、従来、革命期の演劇としてイメージされていた市民劇や新古典主義の悲劇ばかりで

なく、人形劇、アクロバット、サーカス、ヴォードビル劇など、縁日芝居の流れを組む非常に大衆的で娯楽的な演目の上演に力が入られていたことが確認できた。

また、18世紀演劇共同研究プロジェクト (CESAR) の公開データベース等を利用した調査により、タイトルから男装のヒロインを持つと推定される戯曲 (オペラ、パントマイム、バレエ台本を含む) について調査をすすめた。結果として1780年代～90年代の戯曲には、「娘兵士」「女脱走兵」などのタイトルを持ち、ヒロインが兵士となって戦場に赴く話が多く、Desfontainesの*La Fille soldat*が1794年～1796年に46回、Cuvelier de Trieの*La Fille hussard ou Le Sergent suédois*は1796年～1799年に247回の上演が行われ、飛び抜けて人気を博したことが確認された。

(2) 平成25年度は、フランス革命期における演劇の社会的役割の分析のため、革命期の社会的に重要な出来事と演劇に関する詳細な年表を作成した。その結果として、以下のことが確認できた。1791年の「劇場の自由に関する法」の制定が私立劇団の自由な創作活動を促し、演劇の大衆化に拍車をかけた。

1793年に「演劇の監視に関する政令」が発令され、演劇が革命政府の監視下に置かれ、検閲が強化されると同時に、演劇が革命政府により国民の教化の手段として認識された。

民衆蜂起やヴァレンヌ逃亡事件など社会が騒擾状態にある時、劇場が閉鎖されるなど、社会と上演活動が常に連動していた。バステューユ監獄の占拠や王の処刑を描いた戯曲など、実際の事件を描いた作品が多く作られた。

(3) 平成26年度は、国内及びフランスで資料調査を行い、主としてフランス革命期における上演演目の特徴、男装のヒロインを持つ戯曲の分析、各作品の受容を研究した。上演演目については、新作以上に革命期以前の

旧作が継続して多く上演されていたこと、ジャンルとしては喜劇が公演回数の半数を占めるなど、娯楽的な作品が好まれていたことを確認した。

研究対象とする戯曲の分析の結果、革命期の男装劇は、革命前と比較するとヒロインの愛国心と家族愛を強調している点の一つの特徴であることが分かった。また、各作品の受容については、渡仏中、作品の公演回数、調査及び革命期の新聞の劇評、革命期の演劇に関する条例についての公文書記録、舞台衣装についての資料等を調査した。その結果、作品によってはその年の最多の公演回数を誇るなど、大衆の高い人気を得ていたこと、また、男装のヒロインもすでに一流と評価されていた女優に配役されていたことが判明した。

(4) 平成27年度に行った資料調査では、専修大学図書館 (ベルンシュタイン文庫) の貴重書閲覧によって、革命期のパリの劇場の上演記録と劇場関係者のリスト等を詳細に調べ、上演がどのような規模で行われたのかと分析した。加えてフランス国立図書館 (新館・旧館) では、劇作品に用いられた音楽面からの分析資料として、主として革命期の式典や祝祭の変遷と革命歌の歌詞と楽譜を調査した。これらの資料調査を踏まえ、男装のヒロインの中でも革命期に特徴的な女兵士をヒロインとした作品について詳細な作品分析を行った。

その結果として、女兵士をヒロインとする劇は、男女を問わず国民的な愛国心の高まりと、実際に従軍し功績をなした女性兵士たちの存在を社会的背景として生まれたものであることが確認できた。一方で、女性の従軍は風紀を乱すなどの理由から禁止されていた歴史的流れも劇作品に反映されており、結末としてヒロインが軍を辞め家庭に戻るなど娘・妻・母としての女性像の賛美も見受

けられることが分かった。また、当時専門劇場ができるほど人気を博したヴォードヴィル劇には革命歌が多く用いられ、観客に舞台と現実社会との関連を強く喚起すると同時に、ヒロインに革命期の英雄のイメージを与える要素にもなっていることが分かった。

(5) 研究の中心としたデフォンテーヌ作の『娘兵士』(1792年)はヴォードヴィル劇(大衆によく知られた歌の替え歌を挿入した芝居)であり、当該年度は革命期の新聞記事や劇評を詳細に検討し、ヴォードヴィル劇と劇場の革命期における社会的位置付けを同時代の証言から定義を行った。また、フランスの研究者の協力も得て音楽面での考証も行った。その結果、18世紀初頭に誕生したヴォードヴィル劇は、革命前には一時期下火になったものの、大衆側からは娯楽としてヴォードヴィル劇の復活が待たれていたことを検証した。ヴォードヴィル劇の復権のために、フランス由来の芸術のジャンルとして「国家的スペクタクル」と称されるなど、革命期にフランス独自の芸術的遺産としての正統性が強調されていたことを確認することができた。

また、『娘兵士』が上演されたヴォードヴィル劇場は、大衆の嗜好を強く意識した上演を行っていたが、一方で、ヴォードヴィルが元来持つ風刺性が、当局との争いの元となり、上演禁止や作者・劇場支配人の投獄を招いていた。その結果、『娘兵士』は、大衆の興味を引きつけながら、当局の動向を意識し、愛国心を鼓舞するテーマを盛り込んだ作品として作られたことが確認できた。

当該研究の成果は、2016年5月に、カナダのカルガリー大学にて行われたカナダ人文学会でのヴォードヴィル劇についての研究会で発表し、カナダの研究者からも高い評価を得た。革命期の男装のヒロイン像の社会的位置づけについては、学内紀要に論文を発表

したが、今後カナダでの発表をもとに論文作成を行い、カナダのフランス文学研究についての学際的な学会誌に投稿する予定である。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

中山智子、デフォンテーヌ作『娘兵士』(1792年)に見るフランス革命期の演劇の男装のヒロイン像、京都外国語大学研究論叢、査読有、第87号、2016、57-63

中山智子、フランス革命期(1789-1799)のパリの演劇状況、京都外国語大学研究論叢、査読有、第82号、2014、121-128

[学会発表](計4件)

Tomoko NAKAYAMA, *Le vaudeville, le chant patriotique et un spectacle à grand public sous la Révolution*, カナダ人文学会、2016年5月28日、カルガリー大学、カナダ

Tomoko NAKAYAMA, *La Fille soldat de Desfontaines- le travestissement de l'héroïne et les vaudevilles révolutionnaires*, 日本フランス語フランス文学会 2015年度秋季大会ワークショップ、2015年11月1日、京都大学吉田キャンパス文学部

中山智子、フランス革命期の演劇と「王の死」、日本フランス語フランス文学会関西支部大会、2014年11月29日、京都大学吉田キャンパス文学部

中山智子、フランス革命期(1789-1799)のパリの演劇～上演演目に見る劇場と社会の関係～、京都外国語大学国際言語文化学会第2回大会、2014年9月27日、京都外国語大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中山 智子 (NAKAYAMA Tomoko)  
京都外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：80434645

##### (2) 研究分担者

該当なし ( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

該当なし ( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

清水 彰 (SHIMIZU Akira)  
Eric AVOCAT  
Janice BEST  
Johanna DANCIU  
Elise DRONEAUD